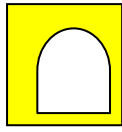


日吉台地下壕保存の会会報



第108号

日吉台地下壕保存の会

新年を沖縄で迎えて

日吉台地下壕保存の会 会長 大西 章

新年明けましておめでとうございます。本年も日吉台地下壕の保存と活用の運動に参加と支援をよろしくをお願いします。

昨年暮れの衆議院選挙の結果、日本は「戦争の出来る国」へと準備が着々と進んでいます。日本は1889年大日本帝国憲法が發布されて以来、ほぼ10年ごとに日清戦争、日露戦争、第1次世界大戦、満州事変、アジア太平洋戦争と戦争を続けています。その後、日本は日本国憲法第9条によって戦争放棄をしていますが、よく歴史をみると、ベトナム戦争では沖縄嘉手納基地から北爆を、イラク、アフガン戦争では自衛隊を派遣しており、戦争当事国になっています。

私は昨年4月から1年間の予定で沖縄の普天間基地の横に住んでいます。平和を学ぶ上で、沖縄戦や基地問題を実際に感じ、理解することが必要と考えたからです。去年は沖縄「祖国復帰40年」の年でもありました。いろいろな講演会等が開かれ、沖縄戦、米軍統治下の沖縄、「祖国復帰」が検証されています。施政権が日本に移っただけで、日本の米軍基地の75%が沖縄にそのまま残されたままで、いまだに沖縄は差別されている、まだ日本の植民地であるとの意見が多々ありました。

沖縄に住んで、昨年9月9日、10万人(首都圏で考えると100万人以上)が集まったオスプレイ配備反対集会が行われた直後の10月1日、反対の声にもかかわらずあまりにも簡単に、爆音を撒き散らしながら危険なヘリモードで低空を飛ぶオスプレイを見たとき、また静寂な川のせせらぎと鳥の鳴く声の中で生活している東村高江住民の方が営んでいるお店のすぐ上を、攻撃用ヘリコプターが手の届きそうな超低空を飛んでくるのを見たときも、どちらも本当に襲われるような感覚を受けました。まだ沖縄は戦争の中で生活をしていることを実感出来ました。

作家大江健三郎は『沖縄ノート』を書いた理由に「私は太平洋戦争以前の近代・現代史において、本土の日本人が沖縄に対してとってきた差別的な態度、意識について資料を読みとく、という事をしてきたのですが、戦後においても、日本の独立と新しい憲法下において、その憲法から切り離されている沖縄の犠牲のもとに、本土の平和と繁栄が築き上げられてきたことに、本土の日本人は、それをよく認識していないのではないか、そしてそれは近代化以来、現代に続くこのような日本人としての特性を示していることなのではないか、と考え始めたのでした。

そして、私がこのような日本人としての、もとより自分をふくむ現在と将来の日本人について、このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか」と述べています。

本土の人は沖縄に基地を押し付けることによって、憲法第9条を維持することが出来、「平和」に暮らせたわけです。憲法第9条の裏には沖縄の米軍基地という存在があったことを、私も含めて本土の人は考えていませんでした。

前に述べたように、いよいよ日本が「戦争への道」を進もうとしています。沖縄から見ていると、アジア太平洋戦争と同じように沖縄を本土を守るための「捨石」としてしか見ていない本土の考え方がみえます。

しかし、戦争が起きれば、または起こせば沖縄に限らず日本全土に影響を及ぼします。戦争をもっと身近なこととして考え、それを回避する行動を起こさなければいけないことがよくわかります。

軍事力に頼らない平和を構築するために日吉台海軍地下壕の活用をこれまで以上に考え続けたいと思っています。



6年間ヘリパッド建設抗議行動
をしている東村高江N4テント

目次

挨拶 新年を沖縄で迎えて(大西章)	1p
報告・資料 戦争遺跡を巡るバスツアー/感想	2~6p
報告・資料 第20回川崎・横浜平和のための戦争展報告	6p~8p
資料 ガイド養成講座第2回、空襲に関する資料の紹介	9p~11p
資料 慶應義塾日吉キャンパス開設の経緯と歴史	12p~13p
連載 地下壕設備アレコレ【その6】(山田譲)	13p
報告「日吉の近代建築」	14p
お知らせ 地下壕保存の会公開講座のお知らせ	14p
お知らせ ガイド養成講座のお知らせ	15p
活動の記録	15p~16p

報 告・資 料

戦争遺跡(横須賀・三浦)を巡るバスツアー

運営委員 新井揆博

本会では、会員の希望に応じて「戦跡バスツアー」を行っています。今年度は、横須賀・三浦の戦争遺跡見学を企画しましたが見学希望者が多く、9月30日(日)と10月14日(日)の2回に分けて実施しました。以下10月14日当日配布された資料を一部省略してご紹介します。

<見学地の一覧>

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1 第一海軍技術廠支廠 | 2 第一海軍技術廠支廠跡記念碑 |
| 3 横須賀海軍航空隊大掩体壕(野島公園内) | 4 明治憲法起草地記念碑(夏島貝塚の隣り) |
| 5 第一海軍技術廠 | 6 第一海軍技術廠残存研究所・工場 |
| 7 横須賀海軍工廠造兵部(東芝ライテック他) | 8 田浦軍需部倉庫 |
| 9 ヴェルニー公園 | 10 城ヶ島砲台 |

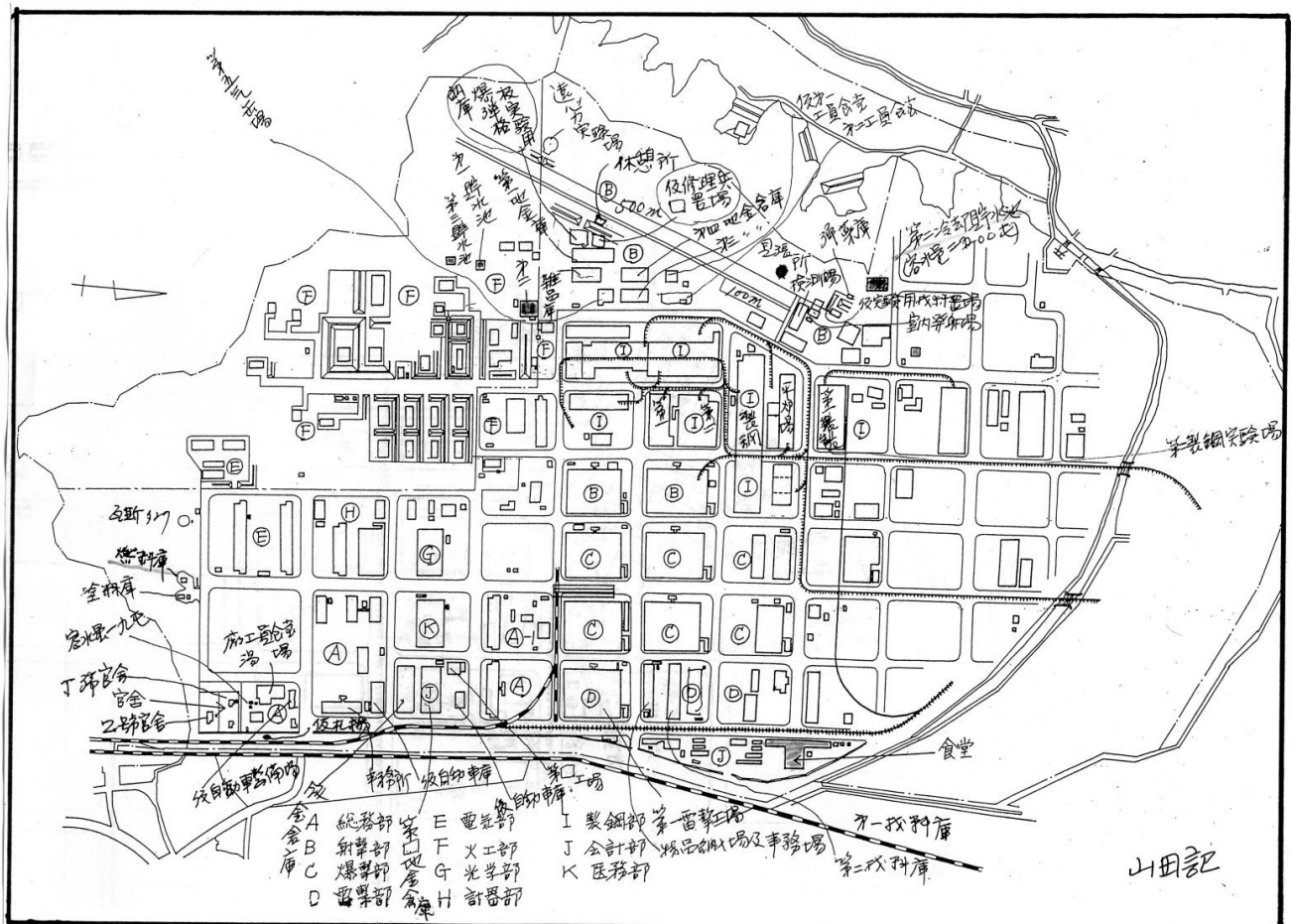
<見学地の解説>

1 第一海軍技術廠支廠

1932(昭和7)年、勅令によって横須賀市浦郷に海軍航空廠が開設。ここで海軍の使用する全航空機について開発・民間会社に技術指導をした。40(昭和15)年、海軍航空技術廠(空技廠)と改称した。41(昭和16)年、浦郷の本廠から航空兵器や爆弾の部門を切り離し横浜市金沢区釜利谷に海軍航空技術廠の支廠を設けた。海軍航空技術廠は、45(昭和20)年2月に第一海軍技術廠と改称され、戦争末期には作業部として13部を持ち、金沢区に設けられた支廠も含めて職員(海軍の武官・文官)1700名、工員3万1700名にふくれ上がっていた。

<説明>この支廠(射撃部・爆撃部・雷撃部・火工部など)で何を作っていたのか

○第一海軍技術廠支廠配置図



川島一美氏、山田善一氏提供

2 第一海軍技術廠支廠跡記念碑

<説明>「支廠記念碑」はなぜつくられたか

第一海軍技術廠支廠跡記念碑 (原文は縦書)

山梨県知事 天野 建 書

元第一海軍技術廠支廠跡記念碑

第二次世界戦争の只中、この地に元第一海軍技術廠(前海軍航空技術廠支廠)が存在した。当廠は、海軍の武官、文官、一般工員、養成所出身の工員年少工員、徴用工員等一万余名により、業務を遂行していた。

当廠は、航空機に搭載する兵器の研究、試作、実験、造修等 戦時の先端技術の粋を集めていた。然し乍、戦争の後半、若き男子国民の大半は兵役に服した為に、国内は労働力の不足をきたし、それを充足せんと多くの学業途中の学徒、女子挺身隊、台湾の少年工等が一般工員に伍して国難に挺身した。

昭和二十年初頭、全国民を挙げての善戦空しく、戦況の憂色は顕著となり、同年八月、この大戦は終戦となり、当廠は、その歴史の幕を閉じ、民間の施設に移管された。戦禍による国土の疲弊、人命の損傷等を考える時、再び戦争を繰り返さぬと誓約し、未来永劫に平和国家とし、世界に貢献するよう祈念し、茲に「元第一海軍技術廠支廠跡記念碑」を建立した。

平成十一年七月吉日

元第一海軍技術廠支廠跡記念碑建立協賛会

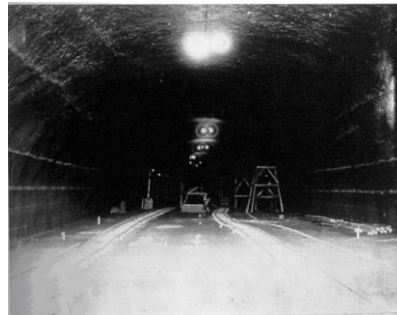
記念碑建立協賛会御芳名

(氏名省略。裏面にわたって刻まれている。下線部分は筆者が記入)

3 横須賀海軍航空隊大掩体壕(野島公園内)



作業中の300設営隊兵士



完成間近な野島大掩体壕



現在の掩体壕内部(飛行場方面を見る)

<説明>「横須賀海軍航空隊と大掩体壕」について

横須賀海軍航空基地では戦争末期、野島(横浜市金沢区野島公園内)の小高い山をくりぬき、主滑走路に直結する日本最大級のスパン 26m(銀河の翼長 20m)延長 270mの大型トンネル式飛行機格納庫とスパン 15m延長 100mの同種の格納庫を終戦直前に完成した。

* 明治憲法起草地記念碑に向かう途中

車中で<説明>「横須賀航空隊残存跡地の建物」について話す。

横須賀航空隊当時の施設は残っているものは少なく、現在確認できるのは②第一士官舎^{ほうすい}だった建物と②①飛行機格納庫(日産自動車株式会社)、⑤①兵員烹 炊所および浴場の煙突のみである(『新横須賀市史別編文化遺産』p 121~3「図 41 昭和 20 年頃 夏島・浦郷地域にあった旧軍施設」本資料 10 参照のこと)。

4 明治憲法起草地記念碑(夏島貝塚の隣り)…バスを降りて数分確認

○明治憲法(大日本帝国憲法)は、ここ夏島にあった伊藤博文の別荘で、伊藤主宰のもと井上毅・伊東巳代治・金子堅太郎が参画して、国民に極秘のうち憲法草案をつくり、1889(明治 22)年 2 月 11 日(紀元節)、欽定憲法として天皇の大権を大幅に規定して公布。第 1 条、大日本帝国は万世一系の天皇これを統治す。第 3 条、天皇は神聖にして侵すべからず。第 11 条、天皇は陸海軍を統帥す。「義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽し」として全軍人に忠節を誓わせた(「軍人勅諭」)。このように明治憲法は、日本国憲法公布(1946 年 11 月 3 日)まで日本の最高法規であった。

この記念碑は、横須賀航空隊基地(『新横須賀市史別編文化遺産』p 122~3「図 41 昭和 20 年頃 夏島・浦郷地域にあった旧軍施設」本資料 10 参照)に、1926(大正 15)年 11 月に建立されたもので、当時、明治憲法草案作成の関係者であり記念碑の設立発起人の一人であった金子堅太郎の言によれば、その場所は伊藤博文の別荘の草案起草の室にあてられた十二畳半の部屋であったという。記念碑は、アジア太平洋戦争後荒廃していたが、当時この地

で操業していた富士自動車株式会社の手によって、一部原型を変えて改修され、1951(昭和26)年2月再度除幕された。

○夏島貝塚…夏島は軍事施設のゆえに、半世紀もの間自由な研究が阻まれていた。発掘調査が行われたのは1950(昭和25)年と55(昭和30)年の明治大学考古学研究室によるもののみで、それも米軍の許可を必要としたのである。調査の過程で発掘されたカキ殻が示した年代は、それまで考えられていた縄文時代の年代を一挙に倍近くもさかのぼらせ、「夏島式土器」は「世界最古の土器」として国際的注目を集めた。調査はその後も安保条約によって日本の施政権が及ばず、ようやく返還後の1972(昭和47)年、各方面からの強い要望により、夏島貝塚は「日本最古の縄文時代の貝塚で、考古学上でも貴重な遺跡」として国指定史跡になり、出土資料は1998(平成10)年に国重要有形文化財に指定された。

5 第一海軍技術廠(廠説明板前で)

○空技廠と「零戦」… 零戦(十二試艦上戦闘機)の試作機は、日中戦争開始の年の1937(昭和12)年5月15日三菱・中島両社に指名があり、設計・生産の工程に入るが、初めに出示された海軍(空技廠)の「要求性能」書は高度で厳しいものであった。その後38(昭和13)年1月17日の官民合同で空技廠で行われた研究会では、三菱の堀越技師は性能要求の水準が高すぎるとの発言があり、又中島社は参加を断念し、三菱一社となった。三菱は先ず設計に当たり、わが国最初の「引込脚」「可変節プロペラ」の採用・前後二本の主桁材を左右一体貫通材とし、材料にわが国で開発されたばかりの超々ジュラルミン材料などを試用した。結果、運動性+高速性の性能は抜群となり、その後空技廠・横須賀航空隊で厳しい検査・実験・地上運転・領収飛行を重ね、1940(昭和15)年1月23~24日領収飛行を最後に制式機に採用された。(『海軍航空技術廠と横須賀航空隊』追浜地域文化振興懇話会 1997年)

<説明>①空技廠の仕事、特に戦争末期の飛行機部「桜花」など

○桜花11型…桜花は一種のグライダーでその機首を爆弾とし、見方を変えれば人間が操縦する爆弾であった。この特攻機を「一式陸上攻撃機」の胴体の下につづいていき、目標の前方で母機から離脱させ、あとは搭乗員が桜花を操縦して敵艦に体当たりするもので文字どおり人間爆弾である。

ところが桜花11型は、その母機の一式陸攻が当時低速で敵戦闘機(こうじ)の好餌であるばかりでなく、桜花自体に増速用の火薬ロケット以外推進力がなく、敵前約1000mの至近距離まで母機に吊るされて接近しなければならないので、敵の迎撃戦闘機によって母機とも撃墜されてしまった。その後、米軍の本土上陸作戦に備え、急きょ陸上基地からカタパルトで射出する簡単な桜花43乙型もはじめられ、三浦半島の武山をはじめ海岸に近いところに基地が設けられた。

昭和天皇行幸碑

表 行幸記念 (原文縦書き)

裏 抗日支那膺懲ノ聖戦将ニ 酬ニシテ我海軍航空機の戦績愈々昂

レルノ時恰モ昭和十三年八月十一日畏クモ

大元帥陛下 海軍航空廠ニ行幸親シク作業ノ實況を天覧遊

ハサレ歡感斜ナラス 剰ヘ廠員一同に御下賜品ノ御沙汰アラセラル

一同恐懼感激措ク能ハス相圖リテ碑ヲ建テ此ノ榮光ヲ永久ニ

記念シ益々協力邁進以テ聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ誓フ

其ノ日旭光特ニ麗ラカナリキ

昭和十三年十一月吉日

海軍航空廠長海軍中將從四位勲二等原五郎謹撰

(山田善一氏作成拓本より)

<説明>②空技廠本庁舎の保存運動と説明板の設置

第一海軍技術廠本庁舎は、1933(昭和8)年ごろ建てられたものといわれているが(施工合資会社清水組、鉄骨造り、3階建て<一部4階>)、1962(昭和37)年6月に北辰工業株式会社に払い下げられてからは、窓や間仕切りの壁などいくつかの改造がおこなわれ横須賀工場B館として使われていた。

外観は西欧風の古典様式を基調としており、基部・中幹部・上部の三層構成からなっている。この建物は2004(平成16)年11月新工場改築のため解体されてしまった。この解体を惜しみ貝山地下壕保存の会準備会では保存運動を行ったがその実現は不可能に終わった。

【編集部より：以下は次号以降に掲載します】

感想

戦跡がつなぐ、いま、未来

運営委員 岡上そう

現在の金沢区から横須賀市の戦時中は海軍の航空技術、兵器に関する開発～製造を中心とした「軍需産業の町」であった訳ですが、その当時の建造物（工場、研究所、倉庫等）が現在でも色濃く、しかし人知れず静かに存在している事を知ることが出来ました。

驚くべき事にその建造物の大半は各企業が「現役」で使っているのです。一見すると分からない程、外観の美しいモダンなデザインの建物や、廃墟寸前の「いかにも」といった建物まで、実に様々でしたが、そこには国家総動員で突き進んだ戦争という歴史があり、またそれは紛れも無い戦跡であり、もの言わぬ戦争の証人なのだという重みを肌で感じる事が出来ました。

しかし、どのような流れで各企業（あまり軍と関係なさそうな）がかつての軍用施設に入る事になったのか…疑問が浮かび、少し調べてみました。

終戦時あらゆる軍用財産は米軍に接收されましたが次第に返還され、1950年(昭和25年)には『旧軍港都市転換法』の施行によって横須賀市は再生の一步を踏み出す事になります。

この時、市が無償で譲り受けた公共施設の他に企業用地があり、関東自動車や東京芝浦電気等の企業が入ります。さらに1951年には追浜地区の接收が解除され、日産自動車が進出します。

1955年頃には「国民車構想」が発表されると国をあげての自動車生産増強の政策により横須賀は発展して行くことになったのです。(参考：三浦半島の歴史)

こうしてみると、軍需と関係が深かったからという理由ではなく、平和への再生を基本に考えられていた流れのように見えます。

しかし、各企業の歴史を掘り下げて見れば、例えば日産自動車はプリンス自動車（旧中島飛行機浜松工場が戦後GHQにより12社に分裂させられ、そのうちのひとつがプリンス自動車。当時中島飛行機を前身とする富士重工業とプリンス自動車の2社は他社との技術提携無しで自力開発を行う力を持っていた。）との合併により優秀な技術者を獲得し、躍進することに繋がり、また、旧中島飛行機も空へのあくなき夢を捨てず、プリンス自動車の中で航空宇宙、ロケット開発を進めるが、プリンス自動車の経営が破綻寸前に。しかし政府の画策により日産自動車と合併。日産がルノーと提携するまでの間、この研究開発は進められ、成果をおさめている。(参考：中島飛行機 Wikipedia)

なるほど、戦争に向かって一つになっていた様々な企業がその技術を携え、新たな日本の夜明けに向かい無数のベクトルを解き放って行ったその先に『現在』があるのだ！私にはそう思えたのです。

いま私たちが普段目にしている風景、町並みは終戦後突然変異が起こった訳ではなく、形や方向性を変えてかつての人々が新しい時代に向かい歩みを始めたというターニングポイントを経て存在しているのだと思います。そういった視点で見れば、現存する戦跡（建造物）は大変重要な近代遺跡であると共に戦後の礎として憲法第9条に匹敵する平和への軌跡なのだ！ということを感じました。



野島公園内の横須賀海軍航空隊大掩体壕
で説明を受けるツアー参加者



第一海軍技術廠残存研究所・工場

感想

新井さんと歩く神奈川の戦争遺跡－横須賀・三浦の戦争遺跡－に参加して
小嶋勝彦

私は、『本土決戦の虚像と実像』『幻でなかった本土決戦』(高文研)などを読み、アジア太平洋戦争末期の本土決戦に備えた防御体制、特に湘南海岸や三浦半島での「備え」に関心をもってきました。このような中での日吉台地下壕保存の会の「新井さんと歩く神奈川の戦争遺跡」の企画に、待ってましたと10月14日に参加させていただきました。天気がイマイチで肌寒い日でしたが、貴重な戦争遺跡を新井先生に案内していただき、たいへん収穫の多い一日でした。

1. 戦後、大企業に譲りわたされた旧海軍工廠跡

最初に訪れたのが京急金沢八景駅そばの旧東急車輛製造(株)でした。電車からよく目にしていたが、延々と奥行きが広がる広大な土地に驚きました。何とここが、横浜市立大学や周りの住宅地を含め、旧海軍技術廠支廠の跡地といえます。1万人以上の海軍武官、文官、工員等々が、航空機に搭載する兵器の研究、試作、実験などを行っていました。家に帰ってからインターネットで調べたら、旧東急車輛の敷地だけで296,000㎡、後樂園球場6.3個分以上の広さです。横須賀だけでなく、隣の横浜市金沢区にも多くの海軍軍事施設があったのでした。

そのあと見た日産自動車追浜工場の敷地は7,107,000㎡、旧横須賀海軍航空隊の跡地といえます。

こうして、旧日本軍の広い軍用地が戦後、大資本に払い下げられていたのを私は初めて知りました。明治初期、官有物払い下げ事件が多数発生しましたが、戦後のドタバタの中で広大な軍の土地がどのような手続きを踏んで大資本に払い下げられたのか、私には新たな疑問が残りました。

2. いまも使われている旧海軍工廠施設

西欧風の古典様式を基調としていたという第一海軍技術廠本庁舎は2004年に解体されてしまいましたが、高圧風洞場等々の海軍空技廠研究所・工場、工廠造兵部の機銃工場や砲熕工場、軍需部倉庫などがいまも多数残っており、それらが東芝ライラク(株)や自衛隊などによって使われていました。戦後67年経ついまなお、横須賀は戦前の海軍がそのまま生き続けているのを感じました。

3. 城ヶ島砲台

城ヶ島公園に2基あった砲台は、1921(大正10)年ワシントン軍縮会議により廃艦になった戦艦「安芸」の副砲(45口径25cm連装砲塔)を転用して備え付けられたといえます。ですから、戦争末期の本土決戦用として備えられたものではなく、東京湾防備のための三浦半島要塞地帯防衛施設の一環のようです。45口径25cmといえますから、砲弾の直径は25cm、大砲の長さは25cm×45=11.25mでしょうか。砲台の下の地下施設を見学しましたが、トロッキと昇降機で砲弾を砲台まで運ぶ頑丈な施設が残っていました。いまはのどかな公園ですが、戦争のための巨大な施設であった戦時下の様子を思い浮かべました。

4. 最後に

『本土決戦の虚像と実像』で新井先生は三浦半島の長井・初声地区には、水戸海岸南端・北端の狙撃用洞窟陣地、黒崎の鼻の洞窟砲台、長浜の狙撃用洞窟陣地等々があり、油壺には特殊潜航艇「海龍」「震洋」、松輪に特攻艇「震洋」、野比に特攻兵器「伏龍」の基地があったと記されています。もし本土決戦が行われたならば、日米双方に悲惨な戦禍が加わるころでした。こんどは、海からこれらを見てみたいと思いました。貴重な案内をしていただき本当に有り難うございました。

報告

第20回川崎・横浜平和のための戦争展報告

運営委員 亀岡敦子

2012年10月27日、28日に「第20回川崎・横浜平和のための戦争展」が、川崎市平和館で開かれました。同館は全国でもめずらしい公立の平和館で、私たちの平和のための戦争展は、この館があったから始まり、続いているといっても過言ではありません。

今年の実行委員会は、「登戸研究所保存の会」「日吉台地下壕保存の会」「蟹ヶ谷通信隊地下壕保存の会」に、「川崎中原の空襲・戦災を記録する会」が新たに加わりました。まさに地元

で綿密な空襲や戦災の聞き取りを続けている会の参加は、心強いกำลังใจで、内容にひろがり
と深みがでました。

写真と資料の展示は、登戸研究所・蟹ヶ谷通信隊地下壕・日吉台地下壕・神奈川の戦争遺
跡・中原区の空襲と戦災の記録地図・登戸研究所と日吉台の実物資料・市民の描く戦争絵画
など、毎回同じ展示も多いのですが、来館者の多くは全てのパネルを熱心に見ているように
思います。

文化行事は「再生の大地」合唱団による撫順戦犯管理所を題材にした組曲で、感動的な合
唱でした。ドラマ仕立ての演技といい、失礼ながら若々しい歌声に感心しました。

シンポジウム「戦争と地域、そして戦争の記憶の継承」は、渡辺賢二さんの司会で、実行
委員会を構成する3団体から新井揆博・大図建吾・松元泰雄さんがパネリストとなり活動内
容や現状、どのように戦争の実相を継承するかを語り合いました。登戸からは登戸研究所資
料館開設からの1年半の成果について、中原からは空襲を詳細に記録した冊子刊行にいたる
道のりを、日吉は近年のマムシ谷地下壕入坑部の調査や日吉寮のリノベーションなどについ
て報告がありました。

若者の発表「戦争の記憶をどうひきつぐか」は、今年も3組の若者たちによって興味深い
研究発表がありました。専修大学附属高等学校歴史社会研究会は、地元杉並区にのこる忠魂
碑を夏休み返上で調査し、貝山地下壕保存する会の大学2年生の池田直人さんは横須賀の地
下壕内の膨大な写真を披露しました。明治大学大学院生の山口隆行さんからは、資料館開設
までの経過が手際よく報告されました。

午後は著名な作家であり、東京大空襲・戦災資料センター館長早乙女勝元さんの記念講演
がありました。背筋をのぼして、立ったままでご自身の東京空襲体験をもとに静かにお話を
されました。ゆるがないで活動が続けた人だけが持ちうる迫力が、80歳の小柄な身体から
溢れていて、聴衆の心に届いた、そんな講演会でした。

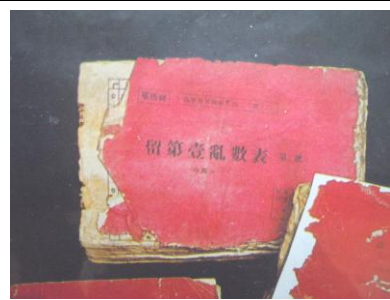
2日間の延べ参加者は約400名で、密度の濃い戦争展だったと自負しています。会員の
みなさまからも多くの賛助金が寄せられました。ありがたく感謝申し上げます。どのよう
にすれば多くの方に来てもらえるか、この課題は今回も残りました。来年は日吉で開催予定
です。どうぞよろしくお願い申し上げます。



日吉の展示も多くの方を集めました



シンポジウムのパネリストの皆さん



写真展示した海軍の暗号書

資 料

若者の発表「戦争の記憶をどうひきつぐか」発表要旨 2012. 10. 28

発表①「地域と戦争—杉並の忠魂碑から考える—」

専修大学附属高等学校歴史社会研究会（中垣・木屋・宮崎）

本研究会では、これまで「鳩」・「ハチマキ」・「刀」を題材に、戦争と平和について考
え、この戦争展でも発表してきた。

今回は、身近な場所に残る「戦争」の形跡を探るため、杉並区内に安置されている「忠魂
碑」を調査した。調査方法としては、杉並区教育委員会が編集・発行した『杉並区の石造物
（記念碑等）』（1983年）のデータをもとに、実際に忠魂碑がある現地へ行き、再調査と実
物の撮影を行なった。

日清・日露戦争期を中心に建てられた忠魂碑は、当時の杉並区内の各地域における戦争へ
の対応や人間関係などを浮き彫りにする一助となる史料である。このような史料を分析する
ことによって、「戦争の記憶」を少しでもよみがえらせてみたい。

発表②「横須賀市における地下壕の実態」

池田直人(鶴見大学2年・貝山地下壕保存する会)

太平洋戦争末期、本土への空襲が激化すると横須賀でも鎮守府、工廠、航空隊、その他各廠・各部・学校等の海軍施設は防空のため疎開や地下化が積極的に進められた。それらは倉庫壕(格納壕)、掩体壕、地下工場、地下病院、居住壕等多様であり、民間(家庭用)の防空壕と比べて大規模複雑であり、単なる退避用の防空壕とはその性格が大きく異なる。これらの構築は本土決戦準備とも併せて行われたと考えられる。

市内の特殊地下壕数は全国的にみても多いことが調査でわかっている。山が多く「日本一トンネルが多い街」としても知られている。戦後70年近くが経過しその存在が忘れ去られつつあり、開発等で消滅したものも少なくない。現状及び実態を探索し、残された地下壕から軍都横須賀の太平洋戦争末期の状態を考える。

発表③「若い世代が歴史を学ぶ意義―登戸研究所資料館の活動を通して―」

山口隆行(明治大学大学院博士後期課程2年)

2010年3月末日、明治大学は平和教育登戸研究所資料館を開館させた。同資料館は、かつて明治大学生田校舎を含む一帯に存在した、陸軍登戸研究所について取り扱ったものである。

研究所に関する調査・研究、あるいは資料館の設立準備・運営などは、若い世代が歴史を学び、時に自ら主体的に関わることで成り立ってきた。報告者もその中の一人として、これまで約3年間、資料館に関わっている。本報告は、これまでの歩みを振り返りつつ、若い世代が歴史を学ぶことの意義について、報告者が活動の中で感得したことをまとめたものである。

上記のテーマに関し、今回は若い世代の興味関心、世代間の交流の意義、新しい人間を呼び込む意義の三点から考察し、若い世代が歴史を学ぶという行為が、他の世代も含めて歴史認識を深めることや歴史的事実を新たに解明することにも繋がること、そして若い世代自身の中に歴史的事実に対する関心があることを指摘する。

資料

平和のための戦争展シンポジウムより

第20回川崎・横浜平和のための戦争展シンポジウム

2012年10月27日

日吉台地下壕保存の会の活動と戦争遺跡を地域の文化財として保存する意義

日吉台地下壕保存の会 新井揆博

1 活動のねらいと取組み

私たちは、戦争の傷跡を残す日吉にある戦争遺跡から深く学びアジア太平洋戦争の実相に迫る努力を進めています。それは二度と悲惨な戦争を繰り返さない平和な世の中にあることにある。

そのために、①小・中・高校生と研究者・市民を対象に、日吉の戦争遺跡(地下壕を含む)を通して戦争の語り部として見学会を開催していること。②「ガイド養成講座」を充実させ、ガイドの輪を広げていく。③日吉台地下壕の学術調査・研究及び学習会を開催する。④日吉における戦争遺跡の文化財指定早期実現を文化庁に働きかける。⑤全国の戦争遺跡保存運動の会と連携を深め保存運動を盛り上げていく。⑥誰でも訪れて学べる「日吉平和ミュージアム」建設づくりに努力するなどの目標を掲げてとりくんでいる。

2 戦争も敗色強まるなか海軍の中樞が日吉にきた(戦争遺跡の特徴)。

軍令部第三部・連合艦隊司令部・海軍省人事局・功績調査部・経理局・航空本部・東京通信隊など

○日吉にきた海軍は何をやったか

レイテ沖海戦→硫黄島の戦い→沖縄戦(戦艦大和出撃など)→海軍総隊の結成(本土決戦準備)

…指導部は、兵士に対して全てが「特攻戦術による玉砕」を求めている。

豊田副武軍令部総長は、昭和天皇の前で本土決戦を迎えるにあたって「全軍特攻精神に徹し皇国護持に邁進し作戦準備を進める」と述べた。

…45年6月「国民義勇兵役法」成立。

○戦争遺跡は「軍事遺跡」だけではない

1) 慶応義塾にとって

- ・海軍の中枢が来て、「学び舎」が軍事施設になった。そして2600mの地下壕を掘った。
- ・500名の予科生が「学徒出陣」(大学全体で3000～3300名)。
…捕虜になるなら死ねと
- ・2225名の戦没者、半年早く戦争が終わっていたら少なくとも1000名は死なずにすんだ。
- ・工学部の80%の建物が空襲で焼かれ3名の職員が死に、兵士1名が死んだ。
- ・戦争が終って海軍の兵士は各家庭に帰った。代わりに米軍が入り日吉キャンパスに4年間もいた。

2) 日吉の住民にとって

- ・箕輪地区(約50戸)では、1937(昭和12)年の日中戦争勃発以来、働き手の多くが徴兵され、10名は帰ってこなかった(戦死者の確率は極めて大きい)。
- ・1944(昭和19)年11月ごろ海軍は測量に来て、その後呼び出され、土地を言値で買い取られ断れなかった。地下壕を掘るのに家が邪魔だと移動、家はガタガタになったあげく空襲で焼かれた。
- ・45(昭和20)年4月4日、4月15日～16日、5月24日、宮前地区31軒中25軒焼失。箕輪地区50軒中25軒焼失。大門地区20軒中18軒焼失。空襲は凄まじかったが公式記録にない。
- ・日吉台国民学校では学童疎開・半月後功績調査部の接收・そして空襲で全焼。
- ・町会長が備蓄米を焼け出された住民に勝手に配ったということで留置場に入れられた。

3 日吉の戦争遺跡を保存し平和のために活用する

戦争の傷跡を残すこの戦争遺跡は、今や「戦争の実相を知る」貴重な①歴史研究の資料、②歴史教育・生涯学習の教材、③平和学習の物証・平和の語り部である。ここに来て、20世紀の戦争と平和の伝承は「人から物へ」移らざるを得ない。すなわち戦争遺跡は「戦争遺跡をして戦争の実相を語らせる」貴重な存在で文化財なのだ。このことを地域で確認し、国の遺跡として保護し歴史認識を深めつつ平和構築のために活用していきたいと願っている。

資 料

2012年度ガイド養成講座、空襲、日吉寄宿舍に関する資料の紹介
運営委員 石橋星志

前回のガイド養成講座は、既報の通り盛況の内に終了し、ガイドも多く見学会に参加していただけるようになりました。今回は、その講座のうち、小野静枝さんの横浜大空襲体験と横浜空襲を記録する会などの活動紹介と、東横線沿線の空襲についての山田譲さんのレジュメ、日吉キャンパスの歴史についての亀岡敦子さんのレジュメを掲載します。

2012年度第3回講義より

2012年5月12日

戦争体験—横浜の空襲を記録する会—と私

小野 静枝

はじめに 私 1932年、横浜市港北区太尾町に生まれる。同年、満州国建国(前年、満州事変—柳条湖事件勃発)。(37年、日中戦争開始)。39年、市立大綱小学校入学・国家総動員法成立。41年、小学校は国民学校に、4年生。44年、中区の横浜市立第一女子商業学校(元、市立女子専修)入学

① 1945年5月29日、—生死の境とあの言葉—

1945年5月29日、横浜大空襲 午前9時22分～10時30分、B-29(空の要塞)517機・P-51(護衛機)101機による、関東唯一の昼間の大空襲。

ルメイ指揮する第21爆撃機集団による綿密な爆撃作戦計画は5つのポイント(1P 東神奈川 2P 平沼橋 3P 関内 4P 吉野町 5P 本牧)を設定、集中爆撃。

★第一ポイント・東神奈川にて空襲に遭遇・・・13歳、上記女学校2年在学中。

爆撃下で、一人の青年と出会い、手を取りあって、脱出に成功。忘れられぬ言葉が残された。「この人に、出会えたから、自分も生きられた。」(青年の言葉) ★親友一人死亡(遺体不明)、「三羽カラス」と言われた二人の親友は、以後不通に。

② 1945年8月15日 敗戦 —ただ、前向きに—

大空襲で中区の女学校は、外郭は鉄筋が残ったが、内部全焼、6月半ばより敗戦迄、同和火災海上火災に動員される。

8月末、米・第8占領軍の進駐。県庁を除く中心街大部が接收。母校も接收さる。

9月半ばより、南区の市立共進小の一部を借り、2学期開始

46年11月、日本国憲法公布(47・5施行)。47年6・3・3制学制改革。

49年、旧制女学校修了、多くの友は卒業し、就職して働き手と成り、巣立った。

49年4月横浜市立横浜商業高校(Y高)と統合、男女共学の実施(占領軍の命による一テスト・ケース) 50年、同校、共学1期生として卒業。

50・7月、朝鮮戦争勃発、ショックを受ける。—もう無いと思った戦争が、又—この頃、K大学・法学部中途募集を機に入学する、が続かず52年、5月、中退。

53年、結婚 55年長女・57年長男出産、その後間もなく「戦争体験」を書く。

③ 1971年5月、戦争記録運動のはじまり —勇気を出して、外へ—

「横浜の空襲を記録する会」発足、体験記を持って、会へ参加。

全国的に立ちあがった「戦争の記録運動」。

8月、東京で「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議」が結成発足する。参加。

④ 1974年4月 —私の大学—

「横浜の空襲と戦災編集委員会」(横浜市・横浜の空襲を記録する会合同) 発足

★上記、編集事務局(有隣堂事務館内)事務局員として、市民との窓口任命される。被災者の悲しみ・無念が、27回忌(仏教的)の26年目に、野に火が放たれたように全国的・記録運動が発生、市民が立ち上がった。横浜では市・市民・研究者が、一体となって、正に「天・地・人」が揃い、その時間は、厳しい作業も喜びに変えた。

—私にとっては、自身の解明と、そして社会・多くの師の傍らで、私の大学—

1977年3月『横浜の空襲と戦災』全6巻刊行。市民の要望に応じて市民版も刊行。

同年『原爆』写真集「子どもたちに世界に被爆の記録を贈る会」編集運動に参加。

77年12月〜78年4月、市長選、燃え上がる「市民の市長をつくる会」裏方手伝う。

78年、大学の公開「横浜市立大学市民文化センター」準備・発足、後ゼミ参加

(戦災誌編集スタッフ服部一馬、今井清一、伊豆利彦、斉藤秀夫先生他、小野も裏方)

1977年、高校教科書『新日本史』家永三郎著(三省堂)に小野体験記掲載される。

⑤1981年〜97年 —やり残したことを 1—

★「神奈川県戦災被害者の会」会長、鋤柄敏子(1978年発足)の支援と聞き取り調査を開始、85年『その日を生きつづけて』—戦災障害者の記録—(大月書店)刊行。

97年『生きているだけで平和の・・・』—上記、会20年のあゆみ—編集・刊行

⑥1996年 —遂に、同じテーブルで、語り合う—

★1996年9月、B-29 314爆撃機(東神奈川担当)搭乗者B・ヤングクラス氏ご夫妻と逢い、対談の機会を得る。座談会「有隣」346号掲載

★ 2004年「第8回横浜文学賞」(横浜文芸懇話会)

★ 2010年「第59回横浜文化賞」(横浜市) —横浜の空襲を記録する会—受賞

⑦2000〜2012年 —やり残したことを、2—

2012年「戦争体験証言集」編纂中、近日刊行予定。

★戦災誌(第1巻)では、市中心部が、主となり、遣り残した地域、周辺地域の空襲調査は宿題となる。その一つ、港北区を「東横沿線・空襲被害調査」として、「日吉台地下壕保存の会」の皆さんと、進める。地域の方々のご協力や、フィールド・ワーク、調査を重ねた結果、「若者や子供たち」に分かりやすい、「この地域の戦災地図」も生み出す事ができました。

おわりに この間、東日本大震災・原発事故は、誠に涙無くして、見る事は出来ません。

しかし、これは現地のみの問題ではなく、この試練は全国民に反省を促されているように思います。戦争体験者はこの災害で、60 数年前の苦しみを、新たに思いおこし、改めて、戦争を考えた、話されました。 有り難う御座いました

2012 年度第 3 回レジュメより

2012.5.12

中原区での空襲被害と東横線沿線の被災

山田 譲

(1) 中原区の空襲

4 月 15 日 (川崎・蒲田大空襲) 一上平間、中丸子、下沼部、神地、丸子、井田、木月
 荏宿、市ノ坪、小杉、天神、東新丸子、今井、新城、小田中、宮内

5 月 24 日 (東京南部大空襲) 25 日 (東京山の手大空襲)

一市ノ坪、丸子、木月、今井、宮内、小田中

・中原の空襲の特徴一目標は軍需工場と住民の家屋・市街地。「記録する会」中間報告抜粋

(2) 東横線沿線空襲被害の全体像—川崎、横浜を中心にして沿線各地に被害

(3) 米軍の日本本土空襲の特徴

① 空襲の種類

a) B29 爆撃機による焼夷弾、爆弾、機雷投下 (市街地、軍需工場、港湾を目標)

b) 艦載機による爆撃、魚雷攻撃、機銃掃射 (軍港、市街地、鉄道を目標)

c) 硫黄島発進の陸軍小型機による機銃掃射 (市街地、鉄道を目標)

② B29 による焼夷攻撃のやり方

a) 小型ナパーム弾 38 発入り集束型焼夷弾 250 kg を約 7 トン搭載し、これに 250 kg 通常爆弾一発を加えて爆撃。爆発破壊と火災発火の組み合わせで焼き尽くす

b) 焼夷弾の散開範囲は幅 150m × 長さ 500m

c) 部隊編成は米陸軍第 20 航空軍第 21 爆撃機集団 (カーチス・E・ルメイ司令官) の下に 3～5 個の航空団をグアム、サイパン、テニアンに配置。出撃は編隊を組まず縦列になって各機ごとに爆撃する。初期には 9000m の高高度で昼間爆撃。その後、夜間低高度爆撃に転換。高度 2000m でレーダー照準。ただし横浜大空襲は昼間爆撃

d) 目標は市街地の住宅・工場で、民間人住民の殺傷を目的にした大量虐殺。たとえば平塚空襲では海軍工廠には目もくれず、住民市街地だけを焼き尽くした

③ 東京、神奈川の主要な都市空襲

2 月 16 日 川崎 艦載機 273 機による機銃掃射

2 月 17 日 〃 艦載機 320 機 〃

3 月 10 日 東京東部 B29 325 機による焼夷弾攻撃

4 月 4 日 川崎 B29 50 機 〃

4 月 13 日 東京北部 B29 352 機 〃

4 月 15 日 川崎蒲田 B29 337 機 〃

4 月 24 日 東京南部 B29 558 機 〃

5 月 25 日 東京山手 B29 498 機 〃

5 月 29 日 横浜 B29 517 機 〃

(4) 軍隊は住民を守らない。

——東京山手大空襲での近衛歩兵第 4 連隊の場合 体験記参照

(体験記では「第 4 連隊」と書かれているが空襲時は第 6 連隊になっていた。)

【参考文献】

『平和ウォーキングマップ・川崎』平和マップづくり実行委員会編 教育史料出版会

『新版 東京を爆撃せよ 米軍作戦任務報告書は語る』奥住喜重・早乙女勝元 三省堂

『空爆の歴史——終わらない大量虐殺』荒井信一 岩波新書

『新版 大空襲 5 月 29 日——第二次大戦と横浜』今井清一 有隣新書 【編集注：被災地図は省略】

慶應義塾日吉キャンパス開設の経緯と歴史

(1) 開設の理由

- ・大正9年4月大学令による大学として新発足、文学・経済学・法学・医学の4学部からなる総合大学となり、大学予科・普通部・幼稚舎・高等部・商工学校・商業学校の学生生徒合わせると1万2千人となり(昭和8年)、三田山上が手狭となる。また関東大震災による被害も甚大であった。昭和3年6月評議員会において予科の郊外移転を決め、候補地を探していたところ10月東京横浜電鉄会社より日吉台地7万坪寄贈の申し出あり。付近の購入地4万2千坪と借入れ地1万7千坪をあわせ13万坪を用地と定めた。
- ・小泉信三塾長(就任直後)・榎智雄理事・堀内輝美理事
- ・日吉建設資金募集趣意書(昭和8年10月)によれば「日吉台は土地高燥眺望開闊青少年子弟の教育に最も好適の地にして其至良の環境の中に完備せる校舎並に寄宿舎を建築し運動設備を整え大学予科其他を之に移して理想的学園を建設する・・・」300万円を目標にかつてない募金活動を行う。(塾監局小史)

(2) 日吉キャンパスを築いた建築家たち

○第一校舎(昭9年4月)・第二校舎(昭11年2月) 曾禰中條建築事務所

曾根達蔵と中條精一郎による建築事務所。戦前の日本で最大最良の設計組織と評された。つねに大仰、威圧を嫌い、所員には気品と堅実を求めた。

国家ではなく民間のため。ゴシック様式の建物、教会・学校・オフィスビル。

最初期の傑作が慶應義塾大学図書館で、慶應義塾日吉キャンパスは、2人の最晩年の傑作。校舎だけではなくキャンパス全体の構想にかかわる。

- ・曾禰達蔵(1853-1937) 唐津藩士の子として江戸生まれ、工部大学校入学し、79年工部大学校造家学科(のち東大建築学科)卒業。同郷の辰野金吾(日本銀行本店・東京駅などの堅固で堂々たる建築で有名)とともにジョサイア・コンドル門下一期生である。海軍に入るが4年後、三菱に入社し丸の内オフィス街の設計にかかわった。
- ・中條精一郎(1868-1936) 米沢藩士の子、東京帝国大学建築学科卒。文部省技師となり札幌農学校などの設計、旧藩主家の上杉憲章とケンブリッジ留学。帰国後、曾禰と事務所を開設、「建築士法」の成立に尽力、国民美術協会会頭、長女は作家の宮本百合子。

○日吉寄宿舎(昭12年8月竣工 9月10日開舎) 谷口吉郎設計

校地の西南端に3棟の寄宿舎と浴場棟。床暖房・洋式水洗便所・個室・家具は備え付け・寮生の自治・寮生主催の体育会など・赤屋根食堂で調理・洗濯袋。

一帯は桃の産地として有名で、まさに桃源郷であったとの証言あり。

昭19年から海軍に、20年から24年9月までは米軍に接収されるが27年から学生寮として中寮が使用された。平成23年横浜市の「歴史的建造物認定」の後押しもあり、24年南寮のリフォームが終了し、眺望絶佳の南寮が学生のもとに戻った。

- ・谷口吉郎(1904-1979) 金沢市出身(九谷焼の窯元) 東京帝国大学建築学科卒 東京工業大学で教鞭をとる傍ら多くの作品を残す(現塾長清家篤の父君清は、谷口が東工大教授時代に助教授であった)。モダニズム建築を代表する建築家。慶應義塾幼稚舎・藤村記念館・千鳥ヶ淵戦没者墓苑・東宮御所・東京国立博物館東洋館・東京国立近代美術館など。芸術院会員・文化勲章受賞(昭和48年)

○基督教青年会日吉ホール(YMCAチャペル)(昭和12年10月)

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計

- ・関西財界のOBが中心となり募金し建築後義塾に寄贈。

鐘もドイツに注文したが、チャペルには置けず、戦中は一時行方不明であったが、現在御殿場の東山荘に「日吉の鐘」として設置され、澄んだ音を響かせている。

・ヴォーリズ(1880-1964) アメリカ・カンザス生まれ、建築家志望であったが、基督教にも強い関心、英語教師として来日(1905)3年後京都で建築監査事務所をひらき、多くのプロテスタント系の教会を設計する。学校では明治学院大学礼拝堂・同志社大学今出川キャンパス内図書館やアーモスト館など・関西学院大学建築群・神戸女学院大学の大部分の建物などが有名である。横浜では、当チャペルと横浜共立学園本校舎が現存するヴォーリズ建築である。

子爵令嬢一柳満喜子と結婚(1919)し、日本国籍取得し一柳米来留(ひとつやなぎめれる)と改名した(1941)。ヴォーリズ建築事務所を一柳建築事務所と変える。

戦後マッカーサーと近衛文麿の仲介工作に尽力「天皇を守ったアメリカ人」とも言われる。83歳で日本人として永眠。妻満喜子(1884-1969)元播磨小野藩主の三女、神戸女学院音楽部卒、米プリマー女子大に留学、近江兄弟社学園園長。

○其の他の建物

- ・赤屋根食堂(学生生協食堂)(昭和9年11月)
赤屋根のスイス山小屋風の内部は吹き抜けの洒落た食堂。海軍は将校食堂として、米軍はビアホールとして使用と言われる。21年焼失
- ・藤原工業大学予科校舎(昭和14年9月)・学部校舎14棟(18年11月)
藤原銀次郎(義塾出身の実業家・王子製紙)が私財を投じて建築した。
- ・藤山工業図書館(雷太設立、愛一郎寄附、工業図書館は白金にあり、昭和19年に売却。後に慶應義塾藤山記念日吉図書館ができ、現藤山記念館となる)
- ・体育会事務所・柔剣道場
- ・陸上競技場(当時の世界基準を備える)・テニスコート・馬場・プール・野球場・ラグビー場・サッカー場

(3) 戦中戦後のキャンパス使用

○慶應義塾日吉キャンパスの海軍

昭和18年10月12日「在学徴集延期臨時特例」公布により学生が学窓から軍隊へ。文部省の命令により、昭和19年3月10日から20年3月31日までの賃貸契約を結ぶ。軍令部第三部、連合艦隊司令部その他が、賃借料13万57円72銭で約5万坪の土地建物を使用開始。昭和19年7月第300設営隊第一校舎近くに地下壕を掘り始める。

第一校舎は軍令部第三部他、日吉寮は連合艦隊司令部が使用する。8月15日海軍第3010設営隊によって連合艦隊司令部に緊急地下施設の構築始まる。

8月19日日吉台国民学校児童120名下田町真福寺と高田町興禅寺に疎開(学区内に疎開するという不自然な学童疎開)。9月10日海軍省人事局功績調査部が日吉台国民学校を接收。

昭和20年1月箕輪地区に海軍省艦政本部地下壕の建設開始。4月7日戦艦大和が撃沈(一億総特攻の魁)。全海軍を統括する海軍総隊司令部を設置、長官は豊田副武、連合艦隊司令長官を兼務。5月29日豊田副武は軍令部総長に、後任は小沢治三郎。

学生のための理想の学園から出された指令の殆どは、学生を含む若者の命を無残な死に向かわせる特攻命令であった。8月15日の終戦の詔勅を聞くや、何日にも渡り書類の焼却が続いたといわれる。

○アメリカ占領軍

昭和20年9月7日(8日)米軍により接收される。6日に米軍がジープで乗り付け24時間以内に明け渡すよう言われた(『塾監局小史』平松幹夫の思い出)。

駐留部隊は、第八軍騎兵第一大隊(アイケルバーガー中將)、校地の建物使用

昭和24年10月1日 米軍より日吉キャンパス返還。第二校舎前で潮田塾長に金色の「日吉の鍵」を手渡す返還式挙行。

32年10月寄宿舎わきの土地の返還をもって、最終的に返還が完了。

☆海軍・米軍接收時の詳細についての調査研究はまだ不明点が多く、さまざまな視点から、研究をすることも、私たちの重要な役割である。

連 載

地下壕設備アレコレ【その6】 Z工法、Z8工法の補足

運営委員 山田 譲

前回、Z工法、Z8工法について書きましたが、海軍技術将校の回想記の引用中心だったのでわかりにくいという意見がありました。それでもっとイメージのわくような補足説明をしておきたいと思います。

Z工法というのは前回書いた通り、爆弾や砲弾に耐えられる陣地設備を短工期でつくる工事のやり方です。全国各地に今でもかなり残っている飛行機格納のための掩体壕もそのひとつです。これはZ5工法になります。土をまんじゅう型に盛り、その上に鉄網を乗せ型枠をかぶせてそこにコンクリートを流し込むやり方です。Z2工法のコンクリートブロック積み立て式は、日吉の地下壕内の壁の作り方としても使われています。艦政本部地下壕で田園調布から持ってきた大谷石を積み上げて壁をつくったのも、この応用です。

他方Z8工法は、地表から地下30~40mの深さまで垂直な竖穴(直径100~150mm)を掘るボウリング技術です。日吉の地下壕では素掘り状態の地下室、地下トンネルの床、壁、天井部に型枠を組み、ここに地表からコンクリートを流し込んで厚さ40cmの分厚い壁の地下壕を、わずか3~4ヶ月で完成させました。そのためのコンクリート注入孔を掘る工法がZ8工法です。日吉の地下壕のあちこちの天井から鉄パイプが突き出しています。これもZ8工法を使っています。アンテナ線の引込や換気のためにもこのZ8工法を使ったと第3010設営隊の伊東三郎隊長は書いています。

このZ8工法は、建設技術としては当時、国際的に見ても最高水準をいくものであったようです。こういう高度な科学技術が軍事技術として開発されていったわけで、科学や技術のあり方を私たちに問いかけているように思います。

報 告

歴史を生かしたまちづくりセミナー+慶應義塾の建築プロジェクト
「日吉の近代建築」

運営委員 亀岡敦子

12月8日、日吉キャンパス独立館の大教室で一般市民に向けた標記のセミナーが開かれました。横浜市都市整備局都市デザイン室と慶應義塾大学アート・センターの共催で、昨年リフォームされた日吉寄宿舍について、さまざまな側面からの講演がありました。保存の会からは運営委員6名が参加しました。内容は、「近代建築と日吉キャンパス」(吉田綱市氏)・「慶應義塾大学日吉寄宿舍南寮のリノベーション」(株式会社三菱地所設計)・「近代建築の保全と活用の未来」(都倉武之氏ほか)で、実際にリフォームに関った設計者の話は特に興味深いものでした。床暖房のパイプの写真など、写真により地下壕見学者への説明の裏付けができたのも、貴重な収穫です。

お知らせ

地下壕保存の会公開講座のお知らせ

日吉台地下壕保存の会では、これまで「日吉をガイドする講座」というタイトルで、広く日吉地域に関わる話を、公開講座の形で7回実施してきました。今回、名称をシンプルにし「日吉台地下壕保存の会公開講座」として、第8回目を実施します。

リニューアル1回目は、本会運営委員でもある都倉先生に、日吉寄宿舍の改修を契機に、日吉寄宿舍について話していただきます。ご自由に参加いただけますので、ご来場ください。

日 時：2013年3月9日(土) 13時~15時

会 場：慶應義塾日吉キャンパス
来往舎シンポジウムスペース演 題：慶應義塾の寄宿舍からみえる日本の近代の一側面
—日吉寄宿舍リノベーションによせて—

講 師：都倉武之 慶應義塾大学准教授

主 催：日吉台地下壕保存の会

後 援：港北区役所

※参加費は無料 事前予約不要

お知らせ**日吉のガイド養成講座 ～戦争遺跡を歩いて平和の語り部になろう～**

2013年度も地下壕ガイドの実践講座をもちます。昨年の受講者はすでに数名が地下壕ガイドで活躍しています。この活動をいっしょにやったださる方お待ちしております。

第1回 4月13日(土) 慶応義塾日吉キャンパス来往舎・大会議室 13時～15時半

《ガイド活動の概要》日吉台地下壕について・日吉台地下壕保存の会の活動

第2回 5月11日(土) 10時来往舎前集合・藤山記念館・会議室 13時～16時半

午前《日吉の丘 フィールドワーク》ガイドダンス・日吉キャンパスの丘を歩く

午後《日吉関係者の体験を聞く》元暗号兵・住民・慶応義塾など

第3回 6月8日(土) 来往舎・大会議室 13時～15時半

《ガイド活動の実際》ガイドのポイント・用語解説

第4回 7月13日(土) 来往舎・大会議室 13時～15時半

《まとめ》アジア太平洋戦争の流れ・フリーディスカッション

☆ 実習《地下壕見学会 4回》 保存の会が行っている定例見学会に実習・ガイド補佐として参加して頂きます。 3月23日(土)(日吉駅集合 13時～15時半)

4月27日(土)・ 5月25日(土)・ 6月22日(土)

定員 30名(高校生以上)・参加費 2000円(全4回分) 見学会は各回300円(保険料)

申込先 ハガキ又はFAXで、①住所 ②氏名 ③電話番号をご記入の上、下記「ガイド養成講座」係へお申し込みください。ㄨ切 3月13日(水)

横浜市港北区下田町2-1-33 喜田方「ガイド養成講座係」

TEL&FAX 045-562-0443 (午前・夜間)

紹介**日吉に関係の深い新刊書のお知らせ**

これまでのガイド養成講座、ガイドする講座でも考えてきた問題に関する新刊が立て続けに出されています。本会顧問でもある白井先生の著書は、「戦後の大学における戦没者追悼」の問題を、日本各地だけでなく欧米の大学との比較をしながら、整理、分析されています。

川崎中原の空襲・戦災を記録する会の著書は、行政の空襲記録から時を経て、地道な調査で地域の空襲の詳細を明らかにした労作です。購入希望者は下記を参照してください。

- 白井 厚慶 慶應義塾大学名誉教授『大学における戦没者追悼を考える』

(慶應義塾大学出版会) 2500円

購入希望の方は、著者(03-3945-5044)に連絡してください。少し割引があります。

- 『川崎・中原の空襲の記録』

川崎中原の空襲・戦災を記録する会 編著 500円

購入希望の方は事務局(松元090-1217-8952)に連絡してください。

活動の記録 2012年10月～2013年1月

9/13 地下壕見学会 緑はればれ2000 16名

9/19 地下壕見学会 おっさんネットワーク鶴見・かながわ医療生協 27名

9/20 冊子「戦争遺跡を歩く 日吉」増刷 5000部

9/21 会報107号発送(日吉地区センター)

9/25 地下壕見学会 日吉台小学校6年生・先生 113名

9/29 定例見学会 42名

9/30 バスツアー 22名

活動の記録(続き)

- 10/4 地下壕見学会 東京労金OB九条の会 33名
 10/7 ガイド学習会 (菊名フラット)
 10/11 川崎・横浜平和のための戦争展実行委員会(法政第二高校教育研究所)
 10/12 地下壕見学会 川崎の歴史と文化を識る会 45名
 運営委員会(日吉地区センター)
 10/13 日吉フェスタ準備説明会(来往舎 ヒヨシエイジ主催 11月17日開催)
 10/14 バスツアー 14名
 10/17 地下壕見学会 憲法九条やまとの会 24名
 10/20 定例見学会 43名
 10/26 川崎・横浜平和のための戦争展 準備作業(川崎市平和館)
 10/27~28 第20回川崎・横浜平和のための戦争展開催(川崎市平和館)
 11/8 地下壕見学会 青葉区聴覚障害者協会 34名
 11/14 地下壕見学会 三田書道会 28名
 11/15 長野県立松本蟻ヶ崎高校2年生・先生41名・調布市教育フォーラム16名
 11/17 日吉フェスタ参加 展示・書籍販売(慶応日吉キャンパス)[荒天・大雨でした]
 11/21 地下壕見学会 伊勢原市人権相談擁護委員 7名
 11/23 ガイド学習会(菊名フラット)
 11/24 定例見学会 41名(山梨平和ミュージアム18名)
 11/28 運営委員会(日吉地区センター)
 11/30 地下壕見学会 慶応義塾大学OB加藤寛ゼミ13名
 12/5 地下壕見学会 東京雑学大学 24名
 12/7 地下壕見学会 日吉南小学校6年生・先生112名
 12/12 地下壕見学会 慶応義塾高校3年生・先生5名
 平和のための戦争展反省会(日吉キャンパス生協麵コーナー)
 12/15 定例見学会 45名
 12/20 運営委員会(日吉地区センター)
 1/14 運営委員会(日吉地区センター)
 1/19 ガイド学習会(菊名フラット)
 ○ 季刊「横濱」2013年新春号に紹介記事
 『東横線が走るまち 日吉駅周辺』
- 今後の予定
 2/4 会報108号発送(日吉地区センター)
 ○ 定例見学会 1/26・2/23・3/23
 4/27



1月14日 運営委員会の日は記録的な大雪でした。日吉の銀杏並木も雪景色

☆地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで ☎045-562-0443(喜田 午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: ☎223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 ☎045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町 2-1-33 ☎045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会